

2019
おもろ
チャレンジ

アンデス地域の伝統信仰とキリスト教の今

文学部 2年

堂坂 美仁

ペルー、ボリビア

2020年2月18日-

2020年3月22日



渡航概要と内容

ペルーでは、リマ、トルヒーヨ、カハマルカ、チクラヨ、クスコに滞在した。遺跡や博物館を見学して歴史と伝統信仰について学ぶとともに、各地の教会を観察し、聞き取り調査を行った。3月15日にはボリビアに入国し、ホームステイをさせてもらいながら、より深く宗教や信仰、習慣に踏み込んでいこうとしていたが、残念ながら早期帰国することとなってしまった。

今回の渡航では出国の時からトラブルが絶えなかった。なんと、航空券の姓名を逆にして予約してしまっていたのだ。チェックインカウンターでそれに気がつき、「安全に目的地まで到着できる保障がないため、飛行機に乗せることは出来ません。航空券を取り直してください。」と言われた。どうしてもだめなのか、とだだをこねて、乗せてもらうことが出来た。その後、ドイツ、パナマ、ボリビアを経由し、そのたびに何か言われるかとドキドキしていたが、特に何も指摘されることはなく、ペルーに到着することが出来た。そして、到着から2日目の夕方。宿に泥棒が入った。外出して宿に戻ると電子辞書とヘッド



ライトが盗まれていた。他の宿泊客もみな何かを盗まれており、怪しい人物を見た人も複数人いた。被害者と宿のオーナーで警察に行き、盗難届を提出した。その後保険会社に連絡し、南京錠も買った。次の日にトルヒーヨに移動した。ここではおなかを壊し、38度の熱が出て5日ほど

寝込んでいた。はっきりとした理由は分からないが果物や牛乳、水が原因だったのかもしれない。日本から持っていった整腸剤や解熱剤を服用した。宿で安静にしていたら治ったので良かった。

そして旅も中盤、ボリビアに向かうためにクスコからプーノへ夜行バスで移動したが、プーノに着いて、スマホが盗まれていることに気がついた。リュックの中のポーチに入れて足の下に置いておいたが気がつくことが出来なかった。バス会社の人に言うと20sol（600円ほど）でなかったことにしようとしてきた。とりあえず宿に移動して電話を借り、保険会社とドコモに電話して回線を切ってもらった。次の日、ボリビアに入国する。そしてその日の夜にペルーが国境封鎖することを知る。ぎりぎりボリビアに抜けられていたことに安堵するとともに、昨日の盗難事件もあって、帰国したい気持ちが高まった。とりあえず約束していたホームステイ先に滞在させてもらったが、そこで「国会に国境封鎖の案が提出された」というニュースを見て、帰国することを決める。帰路は、マイアミまでなんとか行くことが出来たが、そこで、予約した便の欠航を知り、空港に一泊して新たに飛行機を予約した。キャンセルや払い戻しの連絡はマイアミの空港でも試みたが、電話を掛け続けたが繋がらずに諦め、日本に帰国後に行った。

コロナの影響は町を歩いていてもあって、アジア顔を見て（だと思うが）「コロナウイルス」と言われることはよくあった。また、バスや飛行機で隣に乗ってきた人が、あからさまにいやそうな顔をして席を変えることもあったり、私を乗せたタクシーの運転手が「コロナがうつるぞ」と道ばたの人から言われたりもしていた。どうしようもないので無視していたが悲しかった。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

この渡航で特に印象に残っていることは、環境の多様さだ。沿岸地域と山岳地域の都市の雰囲気の違いをすごく感じた。リマ・トルヒーヨ・チクラヨといった沿岸の都市は、とにかく熱くて日差しも強く乾燥していて、賑やかな印象だった。伝統的なアンデスの格好をしている人もいるにはいたが数は多くない。それに比べてカハマルカ・クスコ・プーノ・ラパスではそうした人がぐんと多くなる。体感では半分くらいがそうだ。そして気候も涼しくなり、牧歌的な雰囲気が強まったように感じた。教会では、十字架にキリストの顔が貼られ、それが伝統的な布を着ていたり、伝統的なアンデスの人が絵に描かれていたり、インカの王様がマリ



アとキリストに見守られている絵が飾られていたり、アンデスとキリスト教の融合を感じることも多かった。また、沿岸部の教会ではただ立っているキリスト像や十字架に掛けられたキリスト像がほとんどだったが、山岳地域の教会では褐色の肌をしたキリスト像や鞭で叩かれるキリス

ト像、そしてなにより聖母子像が多く見られた。地域によって、信仰の対象も異なるようである。また、そうした像は教会だけではなく道ばたや市場にも置かれており、細かな差異はあれ、どの町でもキリスト教が生活に浸透している様が見られた。

一方、クスコで聞いた話しでは、新しく家を建てるときに、柱にリヤマの血を塗る習慣が今でも行われているらしい。そうすることで大地の神によって家が守られると考えられているようだ。古くからあった「生け贄」を感じさせるこうした習慣が残っていることはおもしろい。そして当然のことではあるが、教会の前を通るたびに胸に手を当てる人、跪く人、ミサには必ず行くという人、行かない人など、人によっても信仰の度合いはさまざまだった。真光教の信者に話しかけられたこともあった。伝統信仰の継続やキリスト教との融合、さらには新興宗教まで、信仰の多様なあり方に触れることが出来た。そしてそうした多様性も、ペルー/ボリビアの気候、環境の多様性を思えば当然のことだと感じた。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

いままで、アンデスの遺跡や土器がなんとなく好きだったが、具体的に何に興味があるのか明確ではなかった。今回の渡航では、特に野菜を模した土器の精巧さや石組み遺構に惹かれた。また、そうした遺跡と観光のあり方や遺物の展示について考えることが多かったので、効果的な展示方法や遺跡の保護・保存と観光の両立について今後学んでいきたいと思った。

また、今回の旅は最初から最後までトラブル続きだったため、トラブルへの対応能力はずいぶん高まったと思う。上手く話せなくても、とにかく粘り強く、必死な感じで訴えれば助けると感じたし、何より重要なことはいったん落ち着いて、冷静になってから情報収集することだと思った。今後トラブルに巻き込まれたときも、この経験を生かしたいと思う。

本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

調査をする際には、記録することが重要になるかと思いますが、教会や神聖な場所ではそもそも写真を撮ることが禁止されていたり、カメラを出すことがはばかれることがありました。そうしたときに、文章や絵ですぐに書けるように紙をすぐ出せるところに入れておくの良いと思います。また、道ばたで何か気になったことがあったときに、はじめ私はメモするようにしていましたが、それよりも写真を撮っておいた方が、宿に着いてからそのとき引っかけたことをフレッシュな感覚で思い出しやすいことに気がつきました。このように、途中でよりよい記録方法に気がつくこともあると思うので、それが出来るような準備や機材の用意は簡単にしておくの良いと思います。

あとは、ハイチュウなどをポケットに入れておくとお世話になった人にパッと渡せて良いと思

います。

主な奨学金の使途

*渡航費

*雑費、現地移動費

*現地交通費、雑費

*宿泊費、食費

*予防接種、海外旅行保険 など

